

ニンフェアール

イメージ《音・文学》第2回公演

- ジャン＝ポール・サルトル編 -

藤井香織(クラリネット)

茨木博史(フランス語圏文学)

伊藤美由紀(作曲)

牛島安希子(作曲)

会場:フィオーリーレ 音楽ホール

2016. 4. 2(土)18:00 開演



主催:ニンフェアール

協賛:リンナイ株式会社 **Rinnai**

後援:名古屋芸術大学音楽学部

アリアンス・フランセーズ愛知フランス協会

*Un air de musique, par exemple, ne renvoie à rien, qu'à lui-même.*

Jean-Paul Sartre

「音楽は何かを意味するのではなく、音楽そのもの」

ジャン＝ポール・サルトル

## ご挨拶

本日はお忙しい中、ニンフェアール:イマージュ《音・文学》第2回公演にご来場頂き、有り難うございます。

昨年度からスタートしました《イマージュ》公演では、フランス人作家による文学作品からインスピレーションを受けて作曲された新曲を発表するとともに、その作家と関連のある音楽作品を紹介致します。第1回目のヴィクトル・ユゴー編では、ユゴーの詩《夢の坂》のイマージュから、伊藤美由紀が、アルトサクソフォンの為の作品を作曲し、ユゴー研究を専門とする数森寛子による詩の解説により音楽と詩との関係を読み解きました。

今回は、作家であり哲学者でもあるジャン＝ポール・サルトルの小説《嘔吐》からのイマージュにより、牛島安希子と伊藤美由紀が、各々クラリネットの為に新作を書きました。仏文学者の茨木博史によるサルトルについての解説により、今回の公演プログラムをより深く楽しんでもらいたいと思っています。

また、バスクラリネットを専門とする藤井香織を迎えて、B管クラリネット、バスクラリネットソロによる作品を特集致しました。フランス人作曲家の作品を中心に、サルトルが特に好んでいた作曲家の作品を交えてお送り致します。時代背景、文化背景のイマージュから、音楽を堪能していただきたいと思っております。

本年度ニンフェアール第12回定期公演《ReAccord》は、6月19日(日)、愛知芸術劇場小ホールにて、リコーダーの鈴木俊哉さんと、アコーディオンの大田智美さんを迎えて、エレクトロニクスを含んだユニークな編成による企画を考えております。また、皆様にそちらの公演でもお会いできるのを楽しみにしております。

2016年4月2日  
ニンフェアール・NymphéArt  
伊藤美由紀

## ● 牛島安希子 (作曲)

愛知県生まれ。愛知県立芸術大学大学院音楽研究科作曲専攻修了。ハーグ王立音楽院(オランダ)作曲専攻マスター課程修了。室内楽作品、エレクトロアコースティック作品を主に制作。近年は様々なメディアを用いた視覚的表現や演奏家のための身体表現を取り入れた作品が多い。第六回 JFC (日本作曲家協議会) 作曲賞入選、国際電子音楽会議 2013 (オーストラリア)、2014 (ギリシャ)入選、ムジカ・ノヴァ国際電子音楽コンクール 2014 ファイナリスト。2015年、CCMC 入選。2011年度公益財団法人野村財団奨学金授与。作品はノヴェンバーミュージックフェスティバル(オランダ)をはじめ、バーミンガム・リコーダー・フェスティバル(イギリス)、アメリカ、ロシア、日本など世界各地で、スザンナ・ボッシュ、バング・オン・ア・キャン・アンサンブルなどにより演奏されている。また、Karnatic レコード(オランダ)より発売されたCD “Susie tell me a Story!” に作品 “Instan’ stillation”が収録されている。2014年より愛知県立芸術大学にて現代音楽舞台研究会を発足。2015年夏には名古屋市中川運河ARToC10 助成企画、映像サウンドインスタレーション・パフォーマンス作品 “wald” (演出:伏木啓)に作曲家として参加。現在、愛知県立芸術大学、名古屋芸術大学、非常勤講師。現代音楽舞台研究会副代表。

<http://akikoushijima.com>

## Some of These Days

by Shelton Brooks

Some of these days.

You'll miss me, honey,

Some of these days.

You'll feel so lonely;

You'll miss my hugging, You'll miss my kissing,

You'll miss me, honey,

When you're away.

I feel so lonely.

Just for you only,

For you know, honey, You've had your way,

And when you leave me,

You know 'twill grieve me;

You'll miss your little dad dad daddy,

Yes, some of these days.

## 《いつか近いうちに》

作詞・作曲: シェルトン・ブルックス

いつか近いうちに

あなたは、私のことを懐かしく思うでしょう

いつか近いうちに

あなたは、孤独を感じるでしょう

私の抱擁、キスを懐かしく思うに違いない

あなたは、私を恋しくなる

あなたが去った時。

私は、とても孤独だ

あなただけの為に

あなたは自分の道を行く

そして、あなたが去った時

私は悲嘆にくれる

あなたは、私を恋しくなるに違いない

いつか近いうちに

(日本語訳: 伊藤美由紀)

## プロフィール

### ● 藤井香織(クラリネット)

名古屋芸術大学音楽学部器楽科卒業後、ベルギーに留学し、アントワープ王立音楽院修了。在学中にベルギー国営放送管弦楽団の研修生として公演に参加。また、バセットホルン・トリオを結成し、ベルギー国内の他、イギリスでも演奏会を行う。クラリネットを竹内雅一、つつみあつき、イヴォ・リーベルトの各氏に、バスクラリネットをヤン・ギュンス氏に師事。室内楽を小松孝文氏に師事。現在クラリネット・バスクラリネット奏者として東海地方を中心に吹奏楽、オーケストラの賛助出演、ソロ・室内楽での演奏活動を行いながら、後進の指導にもあたっている。2015年12月にはバスクラリネットでのソロ・リサイタルを行った。名古屋芸術大学音楽学部非常勤講師、一宮消防音楽隊委託演奏員、The Nexus Clarinet Ensemble メンバー。

### ● 茨木博史(フランス語圏文学)

1977年生。南山大学専任講師。リール第3大学(フランス)大学院修士課程修了。東京大学大学院博士課程単位取得満期退学。専門はアルベール・カミュを中心とする20世紀のフランス文学、および、マグレブ(北アフリカ)のフランス語文学。近年は日本の昭和期のフランス文化の受容の歴史にも関心があり、特に1950年から60年代にかけてのカミュやサルトルをはじめとするフランスの哲学や文学を、当時の日本の知識人たちがどのように受け容れたかについて研究を進めている。論文に、「カミュを読む中村光夫—『異邦人』論と翻訳—」(2012年)や「Entre l' Histoire et la Terre : Camus et son rêve de l' Algérie des « innocents »」(「歴史と大地の間で:カミュと『罪なき者ら』のアルジェリアの夢」)(2013年)など。

### ● 伊藤美由紀(作曲)

愛知県立芸術大学、マンハッタン音楽院修士課程修了後、コロンビア大学(ニューヨーク)で作曲をトリストラン・ミュライユに師事、博士号を取得。文化庁芸術家在外研修員として IRCAM(フランス国立音響音楽研究所)にて研鑽を積む。東京オペラシティ、ミュージック・フロム・ジャパン(ニューヨーク)、アタック・シアター(ピッツバーグ)、オニックス・アンサンブル(メキシコ)、愛知芸術文化センター、Sinus Ton(ベルリン)などからの作品委嘱ほか、カーネギーホール(ニューヨーク)、レゾナンス音楽祭(パリ)、ISCM 世界音楽の日々(香港)、国際電子音楽会議(マイアミ)、SMC(ギリシャ、スペイン)、Re:New(デンマーク)、ヴィジヨネス・ソノーラス(メキシコ)、マニュエル・エンリケ国際現代音楽フォーラム(メキシコ)をはじめ、世界各国のコンクール、音楽祭に入賞、入選し、国内外で作品発表を続けている。国際交流基金助成により、CMMAS(メキシコ国立音響研究所)にて2回のレジデンシーを行う。ニンフェアール、JUMP の代表として自主企画公演を定期的に名古屋、ニューヨークを中心に展開。第10回ニンフェアール公演は、2015年、第14回佐治敬三賞を受賞。『時の砂』が ALCD80 からリリース。スヴィーニ・ゼルボーニ出版社(ミラノ)から楽譜出版。『音楽現代』に「トリストラン・ミュライユの音楽的思考」ほか特集記事、公演批評を執筆。現在、名古屋芸術大学、千葉商科大学非常勤講師。www.miyuki-ito.com

## プログラム

### Programme

#### 1. ドビュッシー:《シランクス》

Claude Debussy (1862-1918) : *Syrinx* (1913)

#### 2. メシアン:《世の終わりのための四重奏曲》より《III. 鳥たちの深淵》

Olivier Messiaen (1908-1992) : *Quatuor pour la Fin du Temps* - « III. Abîme des oiseaux » (1940)

#### 3. ショパン:《夜想曲2番》

Frédéric Chopin (1810-1849) : *Nocturne n° 2* (1831)

#### 4. 伊藤美由紀:《デカラージュ》(世界初演)

Miyuki Ito: *Décalage* (2016) (Première mondiale)

休憩

#### 5. ストラヴィンスキー:《クラリネットの為の3つの小品》

Igor Stravinsky (1882-1971): *Trois Pièces pour clarinette seule* (1919)

#### 6. J.S.バッハ:《無伴奏チェロ組曲第2番》から《前奏曲》、《メヌエット I, II》

Johann Sebastian Bach (1685-1750) : *Extraits de Suite pour violoncelle n° 2* (1717-1723)

#### 7. 牛島安希子:《glare luminance》(世界初演)

Akiko Ushijima: *glare luminance* (2016) (Première mondiale)

### 藤井 香織(クラリネット)

Kaori Fujii, clarinette

## プログラムノート

### 1. ドビュッシー:《シランクス》(1913)

この作品のオリジナルは、フルートソロです。フランス語の《シランクス》とは、ギリシャ神話のニンフ、シュリンクスのことであり、牧神の笛をも意味します。半音階が巧みに組み合わせられて、東洋的で神秘的な響きのする作品です。イマージュ第1回公演では、アルトサクソフォンにより演奏されましたが、今回は、クラリネットによる演奏です。

ドビュッシー(1862-1918)とサルトル(1905-1980)は、パリでの同じ時代を共有しています。サルトルは、ドビュッシーの作品も好んで聴いていたようです。1914年、第一次世界大戦が勃発した頃には、ドビュッシーは既に癌を発病していました。

### 2. メシアン:《世の終わりのための四重奏曲》より《III.鳥たちの深淵》(1940)

《世の終わりのための四重奏曲》は、第2次世界大戦でドイツ軍の捕虜となり収容所に収容されていた時に作曲された作品です。極寒の収容所のなか、捕虜を前に、壊れかけた楽器により、メシアン本人もピアノで初演しました。3曲目は、クラリネットソロです。メシアンの作品の中で重要な要素となっている「鳥の歌」を使用しており、単独でもよく演奏される作品です。

メシアン(1908-1992)とサルトル(1905-1980)は、年齢が近く、2回の世界大戦を経験しています。パリで活躍した2人の芸術家は、どこかで会っていたかもしれません。

### 3. ショパン:《夜想曲2番》(1831)

ショパンの全21曲あるピアノソロの為の《夜想曲》のなかで最もよく知られている作品です。

サルトルは、子供の頃からピアノをたしなみ、晩年までひたすらショパンを弾いたそうです。《夜想曲6番》を演奏するビデオ映像まで残っています。それほどまでに、ショパンに愛着を感じていたようです。

### 4. 伊藤美由紀:《デカラージュ》(2016)(世界初演)

フランス語の《デカラージュ》は、ずれ、食い違い、不和を意味します。冒頭のクラリネットの低音域の半音階による瞑想的なミステリアスなジェスチャーや、トレモロ、装飾音を含んだ特徴的な音形が、微妙な音色やリズムの変化を加えて、奏者の息や間の取り方により複雑に変容されていきます。形になれないモヤモヤとした曖昧なものを、時間と空間の中の永遠という精神世界のなかに、音響により構築しようと試みました。サルトルの『嘔吐』の最後に、「印刷された言葉の背後にある実在しないであろう何かを、私たちは見抜くべきだ」と助言しています。

### 5. ストラヴィンスキー:《クラリネットの為の3つの小品》(1919)

この作品を作曲していた頃、ストラヴィンスキーは、第1次世界大戦を避けるためにスイスに滞在していました。その為、初演は、スイスのローザヌ音楽院でされました。3曲からなる小品で、最後の3曲目は、ジャズの要素も含んでいます。20世紀初頭のパリでは、音楽家たちはジャズの影響を何かしら受けました。ストラヴィンスキーの作品のなかにも、ジャズの影響で書かれた作品がいくつかあります。

ストラヴィンスキー(1882-1971)とサルトル(1905-1980)も、パリのどこかですれ違っていたかもしれません。初期の代表作である三大バレエ作品は、ロシア・バレエ団によりパリで初演され成功を収めており、パリで活躍していました。しかし、第1次世界大戦中はスイスに、第2次世界大戦中はアメリカに亡命しています。サルトルも、ジャズに憧れ、関心をもっています。小説『嘔吐』のなかでも、サクソフォン伴奏でジャズの《Some of These Days》(いつか近いうちに)の歌がレコードから流れます。

### 6. J.S.バッハ:《無伴奏チェロ組曲第2番》から《前奏曲》、《メヌエット I, II》(1717-1723)

コンサートでは、J.S.バッハの全6曲からなる《無伴奏チェロ組曲》の2番からの抜粋を、バスクラリネットで演奏します。藤井香織さんは、ベルギーに留学中、無伴奏チェロ組曲の1~5番までバスクラリネットで演奏した経験もっており、2番の前奏曲は特に思い入れがあるそうです。

サルトルの従伯父のアルベルト・シュヴァイツァー(1875-1965)は、哲学者、医者、オルガニストとしても有名です。彼は、音楽にも精通しバッハの研究でも業績を残しています。サルトルも、バッハの音楽を好んでおり、子供の頃、敬虔深い家族に連れられて教会にも通っていた経験もあり、従伯父のシュヴァイツァーのオルガン演奏もよく聴いており影響を受けたのではないのでしょうか。

### 7. 牛島安希子:《glare luminance》(2016)(世界初演)

作品の音を思い描くとき、初めに視覚的な音のイメージ映像が脳内にあることが多いが、今回は眩しく、金属的な粒子が空気中に浮いているようなイメージが浮かび、それがバスクラリネットの管を通る空気の音や質感、マルチフォニックの音の印象と重なった。” glare luminance(グレア・ルミナンス)＝グレア輝度 “ は、照明によって感じるまぶしさのことで、視野における照度の分布が不平等なために対象が見えにくくなったり、一過性の盲目状態になったりする。また、強い光を見たとき、水晶体・ガラス体に混濁があるときなどに起こる。日常的に使用する照明はこのグレアを取り除くようにするが、演出などではその効果を利用することもある。サルトルが言わんとするところの、内的必然性をもった音、音それ自身が正当化している状態を生みだすことを目指し、自分が一聴衆として、この場で一番聴きたいバスクラリネットの音を念頭に作曲に当たった。